

e-ビーフNEWS 北の牧場から

October 2023

十勝の秋の始まり

10℃前半まで気温が下がってきました。北海道では異例の残暑がやっと消え、日中は25℃までに収まりつつあります。長かったですね。こんな日がこれからも続くとしたら・・・晴れと雨の日が交互に続き、雨の降り方も土砂降り状態。この降り方も異常。日の入りは早くなり5時過ぎには薄暗くなり時は秋を感じさせ、木々や草も若干黄色みが出てきました。

十勝の畑作業が佳境です。イモ、豆のハーベスターが動き回り、収穫物満載のファームダンプが行きかいます。

牧場の冬支度が始まっています。デントコーンの収穫が間もなく始まります。例年より10日早く、たわわに実を付け背丈越しなので、収量が期待したいところです。が、昨日の事前調査で森に隣接したところがすっかり食われ茎しか残っていません。パンパンの実をシカが列ごときれいに食べていきました。やれやれ越冬前のシカ達の栄養になってしまいました。

まもなく町営牧野に放した牛たちが戻ってきます。



活動のお知らせ

- 9/21(木) 13:00~17:00
11/9(木)10:00-12:00
同日13:00-17:00
- 食肉の生産から食卓までを繋ぐ"日本産肉研究会第32回学術集会 シンポジウムテーマ「有機畜産の現状・普及・課題」**
帯広畜産大学およびオンライン 参加者70名
- 第13回北海道肉専用種枝肉共励会** 北海道畜産公社 十勝工場
第20回資源循環型肉牛生産シンポジウム2023
シンポジウムテーマ「脱炭素社会における資源循環型肉牛生産の意義と役割～耕畜連携における肉牛生産を考える～」
とかちプラザ(帯広市)2階 視聴覚室
基調講演「脱炭素社会における堆肥利用を軸とした耕畜連携・資源循環型農業」
農研機構北海道農業研究センター 上級研究員 池田 成志 氏
- 話題提供1.「北海道子実コーン組合の取り組みについて」 北海道子実コーン組合 技術顧問 小森 鏡紀夫 氏
話題提供2.「アンガス牛による自給飼料中心の牛肉生産」 宮北牧場 宮北 輝 氏
話題提供3.「オーガニックが創る持続的食料供給システム」 ジャパン・オーガニック・コンソーシアム 南埜 幸信 氏
話題提供4.「肉牛専用種枝肉共励会の成績について」 司会 帯広畜産大学 教授 田口 圭吾氏、受賞生産者
パネルディスカッション/意見交換会 ランチョエルパン
現地検討会 北広島

NEWSばか読み

- 農水省 22年新規就農者46千人昨対12%減 親元就農が減少 農家数減他産業へ流出8/31:衰退
- 豚熱 佐賀で発生 九州で初8/31:大産地危機
- ホクレン 加工向け乳価6円アップ プール乳価2.20円アップ
9/1:まだまだ
- 全国 高温と乾燥 酷な残暑9/2:北海道もだよー
- 九州全県 豚熱ワクチン接種へ9/2:拡がり危惧
- 21年度有機面積26600ha6%伸び 牧草や野菜で 全耕地の0.6%
9/4:まったく
- 農水省 粗放管路でも支援 景観作物、鳥獣緩衝帯、生物すみかを追加
9/4:
- 農水省 食料輸入途絶不測時対応の検討に入る
9/5:自給率アップがベースでしよう
- 九州各県 豚熱でワクチン打ち手の確保研修開始9/5:急ぎ
- 北海道 22年ET3割増5000頭増加9/5:需給バランスに変化
- 農水産物輸出がプレーキ 処理水問題で中国向け減9/6:リスクの分散
- レタス葉物卸値が急騰3割高 産地干ばつ9/6:異常気象影響
- 農水省 生乳チーズ向け加工に助成9/7:仕向け加工の内製化
- 北海道生乳生産8月7%減 酷暑影響9/7:北海道も暑さ対策必須
- 農政審 基本法改正で食糧安保、適正価格形成を答申9/12:具体策課題
- 群馬県キャピタルウッズ 廃プラを安価に再資源化9/13:期待
- USDA 米産コーン豊作の見込み5.1%増予測9/14:
- オーガニックライフEXPO東京開催 多数来訪9/15:
- 7月マルキン 肉専用種40都道府県で発動 先月同様9/18:深刻さ増す
- 外食各社、地域別価格差取り入れ増える9/19:地方が安く
- 全農 22年度生分解性マルチの出荷最多 省力重視
9/20:微生物分解分析必要
- コメ等級低下 異例の猛暑で白未熟米が発生9/21:環境変化急
- 全農 10月12月配合飼料2700円/t下げ9/22:でも高く
- 農水省環境省 食品廃棄物の再エネ推進で利用促進見直し
9/23:循環に影響
- 農機自動化の要 RTK共同基地局の拡大9/24:進む
- 農水省 市町村別有機面積ランキング発表 高知県馬路村81%1位
9/26:すごい
- 群馬県農政部 有機農業推進で全職員に講習会9/27:本気度
- 22年新規就農者 60歳代3割減 企業の再雇用影響
9/28:仲間増やそうよ
- 23年度生乳生産見通し10万t減 記録的熱さ影響9/30:きついよね

東京直近NEWS(9/29 Shi-REPORT)

ホルス

市況相場停滞。頭数状況変わらずも枝肉相場は停滞。

販売状況停滞から市況相場も低迷継続。

盆休以降から販売回復しておらず、交雑2等級のパーツとバッティング。

9月残暑厳しくオーダー減傾向変わらず。

10月気温低下とともに需要増期待も一部ロース以外未だカタロース系も余裕あり。

需要期へ向けた販売回復期待も状況は良くない。

経産牛

経産牛相場は高値安定で推移。上場頭数は昨年並み頭数維持。

絶対頭数は減少傾向、酷暑影響からガリ枝比率増、今後頭数減の可能性も時期が不透明。

販売はロイン強気も赤身はウデに一服感あり、バラ系も鈍くなりつつ。

挽き材は引き合いは強くないが、高値相場と製造コスト増から産地は値上げ傾向の状況。国産豚の相場高と輸入物の相場から国産牛挽き材の価格と荷動きに注視。

1. 畜産技術820号(2023.9)

研究レポート2メタンガスを減らす:牛ルーメン機能制御に向けた近未来戦略(小林泰男、北大名誉)

牛の第一胃発酵で嘔気から放出されるメタンガスの温室効果はCO₂の25倍とされ、牛からのメタン放出は畜産における温室効果ガス削減の対象とされ、政府の「ムーンショット型研究開発制度」という従来の延長ではない大胆な発想の研究開発の対象になっています。牛のメタン排出抑制の研究は、1)メタン低減飼料の開発、2)第一胃内低メタン産生菌群の特定、3)第一胃内発酵の連続的発信装置(スマートピル)の開発などの3部門で固体飼養管理のシステム開発が目標です。フェノール系の植物素材や海藻の活用事例、確実な低減戦略への育種選抜や連続モニタリングに必要な電池の高寿命化などの課題もあります。

2. 日畜会報94巻:3(2023.9)

(1)黒毛和種牛における飼料利用性と発育および枝肉形質との関連性(浅田正嗣他、家改セ十勝)

肉用牛の現場後代検定での飼料利用性の検定方法を確立する目的で余剰飼料摂取量(RFI、摂取飼料量のうち代謝体重MWTと日増体DWGに使われた以外の飼料量で、それぞれに係数を掛けた予測式で計算)と発育や枝肉成績などの経済形質との関連性を検討しました。肥育後期の濃厚飼料摂取量で肥育期のRFIが推定でき、RFIを大きい値から4区分すると1と4の発育や枝肉形質は同等で経済性が向上しました。

(2)黒毛和種における画像解析値を用いたランダムフォレストによるBMS推定(宮田あゆ他、帯畜大)

牛枝肉コース芯の画像解析の情報にランダムフォレストという人工知能の一つである機械学習を実装し、画像解析からの推定値を説明変数に、格付け員のBMSを目的変数として脂肪交雑粒子数や細かさ指数、あらさ指数など10形質を投入し重回帰分析を行いました。脂肪交

雑の量、細かさはBMS推定値に+に働き、あらさは-に作用し、BMS7-10でその傾向は強くなり、ランダムフォレストの導入でBMS推定精度は高まり、目的値の94.1%に至りました。

3. 日畜131回大会講演要旨(2023.9)

(1)地域飼料資源を活用した黒毛和種経産牛の肥育が枝肉成績・肉質に及ぼす影響(柴田昌宏他、日獣生大)

地域飼料資源として地ビール粕をサイレージ化したものを93ヵ月齢の黒毛和種経産牛4頭に給与し6ヵ月肥育しました。肥育期間の日増体量は0.79kg、枝肉成績はA2-3、モノ不飽和脂酸割合51.1%となり、血液性状から肝機能などの異常はみられませんでした。

(2)異なる飼養管理で生産された日本短角種の各骨格筋組織におけるCOL1A1の発現(坂本麗水他、北里大)

日本短角牛の大腿二頭筋の遅筋型への移行はI型コラーゲン(COL1A1)発現で検討すると遅筋型移行には放牧の運動負荷より放牧前の濃厚飼料給与水準の高いことに効果があると思われました。

4. 日本産肉研究会32回学術集会(2023.9)

産肉研究会は畜産学会の関連研究会の一つとして今年は帯広畜大で開催されました。

「食肉の生産から食卓までを繋ぐ」という趣旨で年2回の開催です。今年のシンポジウムテーマは「有機畜産の現状・普及・課題」で

- 1)有機JAS認証について 武内 智氏。
 - 2)酪農中心の牧場運営 鈴木氏。
 - 3)有機畜産物の流通について 岩崎 方保氏。
 - 4)有機畜産物の消費者の活動について 御法川 泰子氏。
 - 5)産肉研学生会員企画: 北里大八雲牧場体験から 藤本玲奈氏。
- 5件の話題提供と総合討論で定刻一杯の討論で盛会でした。

資源循環型肉牛生産シンポジウム 2022

転載・再利用は固くお断りします

話題提供「脱炭素社会における畜産を考える 4回シリーズ③
鹿追町 環境保全センター担当課長 城石 賢一氏

精製バイオガスの利用



バイオガスプラントの余剰熱利用



平成25年度バイオマス産産化整備事業で整備された発電機から得られる熱エネルギーは発酵槽等の加温用として利用されているが、家畜分の約2,400Mca/1日(約1000kWh)を蓄熱槽に貯留し、利用施設へ供給する。蓄熱槽では70℃の温水を1.0m³貯留している

バイオガスプラントの余剰熱利用



0歳~10歳魚まで約9,000尾を養育
水温10℃を余剰熱を利用し、19℃まで昇温させることでチョウザメの成長が促進され、キャビア採取を増加させる
キャビアが採取される年齢が8歳魚であり、来年以降は長期的に採育する計画。オスは肉として町内飲食店でチョウザメ料理が提供されている

バイオガスプラントの余剰熱利用



32本のマンゴーを栽培 産木で1本当たり30個のマンゴー収穫が可能
国内では栽培期である12月にマンゴーを収穫するため温度調節により季節を逆転。春から初夏にかけて暖水によりハウス内を冷却し、霜花に合わせて余剰熱によりハウス内を加熱している
収穫されたマンゴーは都内百貨店で販売されている

バイオガスプラントの余剰熱利用



新規作物としてさつまいもを試験栽培
さつまいもの貯蔵温度が13℃~15℃であるため、余剰熱を利用し、保管庫内を加熱
新たな特産品として干し芋を製造、販売

バイオガスプラントの余剰熱利用



瓜蒔施設での発電機余剰熱を利用し、有核での水耕栽培を実施
高付加価値の高い野菜等を中心に栽培試験を実施し、今後施設の増棟を図り、余剰熱の利用拡大を推進
障がい者雇用を推進し、産地連携を推進

